

音楽表現指導への困難感の体系化の試み

竹下可奈子¹⁾ *

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

本研究の目的は、保育者、小学校教員、音楽科教員およびそれらをめざす学生が抱く音楽表現指導への困難感を体系化する試みの第一歩として、先行研究に記載されている困難感を試験的に整理し分類することである。インタビュー調査もしくは自由回答記述による質問紙調査によって彼らの持つ音楽表現指導への困難感についての回答を得ている先行研究46件を分析対象とし、コーディングとカテゴリ化によって分析を行った。その結果、30のサブカテゴリ、6のカテゴリ【内容についての知識・技能にかかわる困難感】【一般的な教授法の知識にかかわる困難感】【カリキュラムについての知識にかかわる困難感】【PCKにかかわる困難感】【保育・教育環境にかかわる困難感】【感情による困難感】が生成された。保育者や教員、学生のもつ困難感が多岐にわたっており、それぞれに対応した教育、研修を目指す必要がある。

(キーワード) 音楽表現指導、困難感、保育、小学校、体系化の試み

1. はじめに

保育者や小学校教員を目指す学生は、音楽表現の指導に対して様々な不安や課題を抱えていることが多い。氏家(2019)は小学校教員を志望する学生を対象に質問紙調査を行い、彼らの過半数以上が音楽の指導へ不安を抱えていることを明らかにした(氏家 2019: 108)。自由記述による回答では、「ピアノが弾けない」「子どもより自分の方が技術がない」「音楽に関する知識がないので何を教えたらいいいのかかわからない」「音楽が嫌いな子どもへの対応がわからない」などの意見がみられ(氏家 2019: 108)、自身の演奏技術や指導法に多くの不安や課題がみられた。また、保育者養成課程に在籍する学生を対象とした研究でも、学生が音楽表現活動の指導に対して多くの不安、課題を抱えていることが明らかにされている(中村 2006、鈴木 2020、上野 2021ほか)。

こういった不安や課題は、養成校を卒業して現場に出ても解消されずにいることが多い。木村ら(2017)は、現場の保育者を対象として、音楽活動全般に関するインタビュー調査を行った。質問項目には、学生の時に学習しておきたかったことや、卒業後初めて現場に出た際に戸惑ったこと、現在園で音楽活動をする際に感じる困難について、などが含まれており、学生時代から現在までの間を通して彼らが抱える音楽活動への不安感について読み取ることができる。また、早川ら(2012)は免許状更新講習を受講する小学校教員を対象に、受講の理由と要望について自由記述による質問紙調査を行った。その中には、やはり自身の音楽

的な技術に関する不安と、指導法に関する不安が多くみられた。

このように、保育者や小学校教員、そしてそれらを目指す学生は音楽表現の指導に対して不安や課題を抱えていることが多い。しかし、それらの調査では得られた回答を分類する観点や分類カテゴリの大きさにばらつきがあり、分類体系の構築が十分であるとはいえない。たとえば豊辻(2018)は、学生が保育者になるにあたって自身に不足していると考ええる音楽的技能と知識について調査を行い、その結果を「音楽的」技術と「保育的」技術に二分した。確かに学生が抱える不安は、自身の音楽表現そのものに関するものと保育技術に関するものの大きく2つに分けられると考えられる。しかし、それぞれの中でも不安要素は多岐にわたるため、個別の不安感を解消するためには、その構成要素をさらに類別化する必要がある。鈴木(2020)はさらに詳しく、学生の音楽表現活動への困難を「音楽的技術」「指導技術」「課題の習熟」「精神的影響」「教材研究」「保育の気づき」の6つの構成概念に分類した(鈴木 2020: 22)。ただ、「音楽的技術」に「ピアノに集中して声をかけられなかった」という内容が入っている一方、「指導技術」にも「ピアノを弾きながら歌詞を伝えることが難しい」という内容が入っており、両者の違いが明確には示されていない。また、そもそも先行研究によって焦点をあてた不安、課題にばらつきがあるため、その全容をつかみづらいという問題もある。

音楽は目に見えないものを扱うという点、指導者による演示が求められる点などから、その困難感が複合的なもの

*連絡先: 竹下可奈子 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

になりがちであると考え。そのため、困難感を解消するためにはその内容を細分化したうえで詳細を体系化し、一つひとつのかかわりや段階について把握することが必要だと考える。

したがって本研究では、保育者や教員、学生が音楽表現の指導に対して抱く不安や課題を体系化する試みの第一歩として、先行研究の内容をもとに困難感を試験的に集約・整理し、分類する。その際、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に勤務する音楽科専任教員および音楽科教員養成課程に在籍する学生を対象とした先行研究についても、分類対象として含めることとする。彼らは音楽を専門に学んでいる点で保育者や小学校教員とは大きく背景が異なるものの、同様に音楽の指導に対する不安や課題を抱えていることは複数の調査で指摘されている（伏見 2001、菅 2007、山崎ほか 2010、宮本 2013）。彼らの不安、課題も分類に含めることによって、より詳細な分析が可能になるとともに、それぞれの比較から各属性特有の不安、困難も明らかにすることができると考える。

2. 用語の定義

2.1 学生、教員、児童について

本研究では、保育者養成課程に在籍する学生を保育学生、小学校教員養成課程に在籍する学生を初等科学生、音楽科教員養成課程に在籍する学生を音楽科学生と呼称する。また、音楽科を専門に指導する教員については音楽科教員と呼称する。保育学生、初等科学生、音楽科学生を総称する場合は学生、小学校教員と音楽科教員を総称する場合は教員と呼称する。

また、幼児教育現場や小学校、中学校、高等学校において指導対象とする子どもについては「子ども」「児童」「生徒」など複数の呼称が存在するが、本研究では「児童」で統一する。

2.2 音楽表現指導への困難感

学生、保育者、教員が音楽表現の指導に対して抱く不安や課題について、困難感と呼称する。

3. 研究方法

3.1 研究デザイン

文献をデータベースにした質的記述研究。

3.2 分析対象

国立情報学研究所の提供する学術コンテンツポータル CiNii（論文情報ナビゲータ、<https://cir.nii.ac.jp/>）にて「音楽」「保育」「指導」「不安」「困難」「苦手」「実習」といったキーワードを掛け合わせて分析対象文献を検索し

た。また、それにより抽出された文献の参考文献や注釈を手がかりに、さらに関連文献を収集した。その結果、213件の文献を見出した。そのうえで、本研究の分析対象としての適性の判断を行った。学生、保育者、教員を対象にインタビュー調査もしくは自由回答記述による質問紙調査を行い、彼らの持つ音楽表現指導への困難感についての回答を得ているものを対象とした。選択肢回答法のみを用いた調査は除外した。また、調査方法が明記されていないなど、研究方法の信頼性が低いものも同様に除外した。最終的に本研究の分析対象文献は、保育者を対象としたものが8件、小学校教員を対象としたものが4件、音楽科教員を対象としたものが1件、保育学生を対象としたものが27件、初等科学生を対象としたものが4件、音楽科学生を対象としたものが2件の計46件とした。

3.3 分析方法

本研究ではコーディングとカテゴリ化によって分析を行った。まず、対象となる文献を精読し、それらに示された、音楽表現指導への困難感に該当すると判断した文言を本文のまま抽出した。次に、記述内容を抽象化する形でコード化した。それぞれを比較検討したうえで、共通性があると判断したものを統合し、サブカテゴリを抽出した。類似性のあるサブカテゴリをさらに統合し、困難感カテゴリを抽出した。カテゴリのコードの一部には、Shulmanの提唱した教師の知識カテゴリを援用した。

Shulman(1987)は、教師が授業の際に複合的に用いる知識ベースを想定し、そのベースを構成するカテゴリとして、以下7つを挙げた。

- ①「内容についての知識（content knowledge）」
- ②「一般的な教授法についての知識（general pedagogical knowledge）」
- ③「カリキュラムについての知識（curriculum knowledge）」
- ④「PCK（pedagogical content knowledge）」
- ⑤「学習者とその特性についての知識（knowledge of learners and their characteristics）」
- ⑥「教育文脈についての知識（knowledge of educational contexts）」
- ⑦「教育目標・価値とその哲学・歴史的根拠についての知識（knowledge of educational ends, purpose, and values, and their philosophical and historical grounds）」

このうち、本研究では①内容についての知識、②一般的な教授法についての知識、③カリキュラムについての知識、④PCKの4つが、抽出されたキーワードの統合に相当であると考え、カテゴリのコードの一部として用いた。また、実技を伴う教科・活動である音楽の特性をふまえ、①には

「技能」の表記を付記し、「内容についての知識・技能」とした。

ちなみにPCKとは、教育内容と教授法が特別に融合したものであり、教師独自のもの、教師の特殊な形式の専門的理解だと定義されている(Shulman 1987: 8)。具体的には、生徒やカリキュラムの状況に応じて、教材を組み替える知識や能力、また生徒の素朴でたどたどしい言葉を手掛かりにしながら、授業のテーマに迫っていく即興的な判断力などが含まれる(日本教師教育学会 2017: 274)。PCK理論はとくに理科、数学教育分野で用いられているが、音楽分野では高見(2021)や長嶺(2021)の研究で用いられている。

4. 結果

分析の結果を表1に示す。以下、カテゴリ (6) を【】、サブカテゴリ (30) を《》として示す。抽出されたカテゴリは、その属性から「知識・技能」「保育・教育環境」「個人的感情」の3つの区分にさらに分類できると考える。「知識・技能」に区分されるのは【内容についての知識・技能にかかわる困難感】【一般的な教授法の知識にかかわる困難感】【カリキュラムについての知識にかかわる困難感】【PCKにかかわる困難感】の4つのカテゴリである。そして「保育・教育環境」には【保育・教育環境にかかわる困難感】が、「個人的感情」には【個人的感情による困難感】が区分される。

5. 考察

学生および保育者、教員が抱く音楽表現指導への困難感に関する記述内容を分析した結果、知識・技能、保育・教育環境、個人的感情の3つの区分に様々な困難感カテゴリが分類された。また、学生、保育者、教員それぞれに特徴的な結果があらわれた。以下に、3つの区分の内容と、属性による困難感の違いについて考察する。

5.1 知識・技能

Shulmanの提唱した知識ベースの構成要素にあたるこの区分は、【内容についての知識・技能にかかわる困難感】【一般的な教授法の知識にかかわる困難感】【カリキュラムについての知識にかかわる困難感】【PCKにかかわる困難感】の4つのカテゴリから構成された。

【内容についての知識・技能にかかわる困難感】では《音楽的知識の不足》《基礎的な音楽技能の不足》《マルチタスクな音楽技能の不足》《レパートリーの不足》《適切な示範の難しさ》《音楽表現に対する評価技能の不足》の6つのサブカテゴリが含まれたが、その多くは保育学生、初等科学生、保育者、小学校教員から抽出されたものであり、音楽科学生や音楽科教員からはほとんど抽出されなかつ

表 1. コーディングシート

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
内容についての知識・技能にかかわる困難感	音楽的知識の不足	歌唱法がわからない
		楽器の奏法がわからない
		指揮法の知識がない
		楽典の知識がない
		曲についての知識がない
	基礎的な音楽技能の不足	大きな声で歌えない
		ピアノが演奏できない
		弾き歌いできない
	マルチタスクな音楽技能の不足	ピアノを弾きながら児童を見ることができない
		指示をしながらのピアノ演奏ができない
レパートリーの不足	立ったままのピアノ演奏ができない	
	児童に合わせたピアノ演奏ができない	
	自信のあるてあそびのレパートリーがない	
適切な示範の難しさ	自身のある弾き歌いのレパートリーがない	
	手本となる演奏ができない	
	人前では緊張する	
音楽表現に対する評価技能の不足	音楽表現の正解がわからない	
一般的な教授法の知識にかかわる困難感	基礎的な音楽指導法についての知識の不足	基本的な歌唱指導法がわからない
		児童が知らない曲の指導法がわからない
		発達に即した歌唱指導法がわからない
		楽器の指導法がわからない
		音楽づくり・創作の指導法がわからない
		鑑賞の指導法がわからない
		伝統音楽の指導法がわからない
		リトミックの指導法がわからない
		休符の指導法がわからない
	言葉がけのバリエーションの不足	言葉がけのバリエーションがない
	児童の動機づけの難しさ	動機づけが難しい
		音楽が嫌いな児童への対応が不安
		恥ずかしがる児童への指導が難しい
	児童の主体性を保持する難しさ	児童を惹きつけられない
		子どもを主体的に活動させるのが難しい
	音楽表現が苦手な児童に対する指導の難しさ	音楽が苦手な児童への指導が難しい
	個人差への対応の難しさ	個人差への対応が難しい
	楽しい音楽表現の実現の難しさ	児童が楽しんで参加するか不安
	児童に達成感を感じさせる難しさ	児童に達成感を感じさせられない
	学習評価の難しさ	グループ活動時の個別評価が難しい
	特別な配慮を必要とする児童への指導の難しさ	評価の方法が難しい
カリキュラムの知識にかかわる困難感	指導要領を見据えた指導の難しさ	指導要領の理解ができていない
		目標およびその達成が難しい
		系統性のあるカリキュラムの難しさ
	活動・授業構成についての知識の不足	活動や授業の構成がわからない
		発展的な授業展開ができない
	教材についての知識の不足	児童の発達・興味に達した教材がわからない
		題材に合った教材の選定が難しい
		器楽活動についての知識がない
		音楽活動についての知識がない
	PCKにかかわる困難感	児童の反応を予想する難しさ
児童へ伝わる説明の難しさ		児童へ伝わる説明ができない
活動規律の保持の難しさ		活動・授業へ集中させられない
		児童の動きを統制できない
活動・授業中の児童の状況の把握の難しさ		活動の切り替えが難しい
活動・授業中の児童の状況の把握の難しさ		その時の子どもの状況が把握できない
即時的な対応力の不足		児童の反応への即時的な対応ができない
即時的な音楽批評ができない		
スムーズな授業展開ができない		
適切な活動・授業展開の難しさ		児童に指導が没入する活動・授業展開の順番がわからない
保育・教育環境にかかわる困難感	時間的制約	活動・授業時間が足りない
	人的環境の不十分さ	自身が十分な練習時間を確保できない
		活動・授業時の人手不足
設備・備品の不足	相談相手のなさ	
	担任との連携が取れない	
	設備・備品の不足	
個人的感情による困難感	演奏への苦手意識	演奏に苦手意識がある
		恐怖心
	ネガティブなイメージ	劣等感
		ネガティブな経験がある
面倒なイメージがある		
練習が好きではない		

た。これらの困難感、音楽そのものに対する知識や技術の不足に起因するものであり、音楽科学生や音楽科教員といった音楽を専門的に学んだ者たちからはあまり抽出されないのは当然ともいえる。ただ、彼らからも、「『注意したい』『こうやってほしい』っていうのをそれこそ範唱すればよかったんですけど、範唱するのもピアノがないと不安なんですよ。だからしようと思ったんですけど、できなかったんですよ」（菅 2007：7）という記述や、「様々な楽器の扱いでとまどいを感じている。自分の音楽経験とも深く関わっており、専攻以外のことも広く学んでおけばよかったと反省している」（山崎ほか 2010：27）という記述が抽出されており、専攻分野以外での細かい部分での知識・技能の習得にサポートが必要であると考ええる。

特徴的なサブカテゴリとなったのは《レパートリーのなさ》で、このサブカテゴリは保育学生からのみ抽出されていた。保育の現場では季節の歌や自然の歌、活動の歌といった様々な歌が一年を通じて数多く扱われており、単にそれらを知っておくだけではなく、自信をもって伴奏できる曲をできるだけ増やしておく必要がある。保育者養成校では、多くの手遊びや歌を教えるとともに、「これであれば自信をもって弾ける」と思える曲が増えるようなカリキュラムを組む必要があると考える。

【一般的な教授法の知識にかかわる困難感】では、《基礎的な音楽指導法についての知識の不足》《言葉掛けのバリエーションの不足》《児童の動機づけの難しさ》《児童の主体性を保持する難しさ》《音楽表現が苦手な児童に対する指導の難しさ》《個人差への対応の難しさ》《楽しい音楽表現の実現の難しさ》《児童に達成感を感じさせる難しさ》《学習評価の難しさ》《特別な配慮を必要とする児童への指導の難しさ》の10個のサブカテゴリが含まれた。

このうち、学生、保育者、教員すべてから抽出されたのは《児童の動機づけの難しさ》であった。歌いたがらない、動きたがらない児童に対してどのように内発的動機づけを促していけばよいのかというのは、音楽を指導する者共通の困難感だといえる。また、「ピアノや歌ができないと子どもはついてこない」（氏家 2019：108）、「指導者の伴奏や範唱がうまくなくても、児童の意欲を高め、『自ら歌おう。』『友達と声をあわせることは楽しい。』という気持ちに導いていくことができるような【指導法が知りたい】」（早川ほか 2012：63）という記述からも伺えるように、指導者側の実技技能のレベルが児童の動機づけにかかわっているとの認識もみられた。したがって、【内容についての知識・技能にかかわる困難感】の解消を図りつつ、それと並行してそれぞれの音楽技能レベルに応じた児童の動機づけ方法について教授する機会を持つ必要があると考える。

また、《音楽表現が苦手な児童に対する指導の難しさ》は保育者と教員からのみ抽出された。学生の短い実習期間で

は、音程が取れない、リズム感がないといった児童をどのように指導するかといった困難感までは行きつくことがなく、その結果学生からは抽出されなかったのではないかと考える。しかし、実際に現場に出てからはそういった児童に対する適切な指導が望まれるため、養成校での教育においても音楽表現が苦手な児童に対する指導法を具体的に扱う必要がある。

保育学生特有の困難感としては、児童が知らない歌を教える方法がわからないというものがあった。未就学児は、年齢によってはまだ字が読めない子どもも多く、一度に記憶できる量も就学後の児童とは異なる。そのため、知らない歌を教える際には独自の技術が必要となる。その点についても学習機会を設けて知識の強化を図る必要があると考える。

【カリキュラムについての知識にかかわる困難感】では、《指導要領を見据えた指導の難しさ》《活動・授業構成についての知識の不足》《教材についての知識の不足》の3つのサブカテゴリが含まれた。

《活動・授業構成についての知識の不足》には、そもそも活動や授業をどのように構成してよいかわからないという困難感が含まれ、すべて保育学生、初等科学生、保育者、小学校教員から抽出された。「他の教科だと教科書にそっていけばよいのだが」（木村ほか 2014：121）という記述からもわかるように、活動・授業構成の規範が彼らの中にないことが困難感の原因と考えられる。この困難感を改善するためには、講義の中で多様な指導事例を示し活動・授業構成のイメージを明確にさせるとともに、模擬授業を通して実践を積み重ねることが望まれる。また、保育学生は実習時の責任実習や部分実習等で「音楽に関する活動」を選択しない傾向にあることが先行研究では指摘されているが（諸井 2019：97）、そういった場合は活動構成について能動的に学習する絶好の機会である。そのため、学生が部分実習等で音楽表現活動に挑戦しようと思えるよう、教員が積極的に働きかける必要がある。

また、《指導要領を見据えた指導の難しさ》については、保育学生、保育者からは抽出されなかった。これは、保育学生や保育者がその点に困難を感じていないということなのか、それとも保育所保育指針、幼稚園教育要領を意識した活動を行っていないということなのか、詳しい調査が必要であると考ええる。

【PCKにかかわる困難感】では、《児童の反応を予想する難しさ》《児童へ伝わる説明の難しさ》《活動規律の保持の難しさ》《活動・授業中の児童の状況の把握の難しさ》《即時的な対応力の不足》《適切な活動・授業展開の難しさ》の6つのサブカテゴリが含まれた。

そのうち、すべての学生、保育者、教員から抽出されたのは《活動規律の保持の難しさ》であった。高見は「音楽科授業では他教科以上に、生徒のノリのよさや、和やかな

雰囲気を保ちつつも、けじめや切り替えを必要とする授業展開が求められるため、教師の高度な力量が不可欠」（高見 2019：172）と指摘しているが、本研究でも活動規律を保持することに対する困難感が多数抽出された。先述の通り、《児童の動機づけの難しさ》もすべての学生、保育者、教員から抽出されており、児童のやる気を引き出し能動的な活動を促す一方で、活動規律も維持するという、両立の難しい指導を行うことへの困難感がうかがえる。その技術の習得のためには実際の活動・授業実践を通して児童の動きを観察するとともに、自身の実践についての評価、省察を行うという経験の繰り返しが重要であると思われるが、養成校においてその機会を作るのは難しい面もある。実際の授業映像の観察や模擬授業等を組み合わせながら対応していくのが望ましいと考える。

このほか、《活動・授業中の児童の状況が把握できない》《即時的な対応力の不足》の2つについても、とくに実践的な学習が必要な困難感だといえる。こういった困難感をどのような講義、研修によって解消していくかが大きな課題であると考ええる。

5.2 保育・教育環境

保育・教育環境の区分には、【保育・教育環境にかかわる困難感】カテゴリが分類された。そして《時間的制約》《人的環境の不十分さ》《設備・備品の不足》の3つのサブカテゴリが含まれた。

《時間的制約》には活動・授業時間の不足についての困難感のほかに、自分の練習時間の不足についての困難感が含まれた。これは「音楽は教材研究に時間がかかる。ピアノが弾ける方にとっては何でもないことも、やっぱり準備をしようと思うと他の授業よりは時間をかけて準備が必要です」（木村ほか 2014：119-20）という記述からもわかるように、音楽特有の困難感であると考えられる。

【保育・教育環境にかかわる困難感】はいずれも個人の努力や頑張りでは改善しづらい内容であるが、それらをふまえた指導法の知識や技能の習得に力を入れることによって改善を図る必要があると考える。

5.3 個人的感情

個人的感情の区分には、【個人的感情による困難感】カテゴリが分類された。そして《演奏への苦手意識》《ネガティブなイメージ》の2つのサブカテゴリが含まれた。

【個人的感情による困難感】は、保育学生、初等科学生、保育者、小学校教員から抽出されており、基礎的あるいはマルチタスクな音楽技能の不足についての困難感と密接に関係があると考えられる。保育学生を対象とした調査では、「ピアノに自信がないので、はじめの2・3日はおそろしくて、音楽リズム領域における実習をさけていたが、とうとう自らはげまして、日案に組み入れてみた。しかし

当日になるとまた不安になり、何度もやめようと思ったが、ついにその時間が来て、ふるえながらピアノの前にすわり夢中で一曲弾いたら、ぐっと気分が楽になった」（高橋 1969：104）との記述もみられ、成功体験を踏むことの重要性がうかがえる。《ネガティブなイメージ》には「今までの実習でうまくいったことがない」（中池 2020：23）との記述もあり、音楽表現に関して失敗体験や挫折経験のある者の精神的フォローを行いながら、段階的に成功体験を踏ませていくことが重要だと考える。

6. 結論

学生、保育者、教員のもつ音楽指導への困難感の内容として、【内容についての知識・技能にかかわる困難感】【一般的な教授法の知識にかかわる困難感】【カリキュラムについての知識にかかわる困難感】【PCKにかかわる困難感】【保育・教育環境にかかわる困難感】【個人的感情による困難感】の6つのカテゴリが明らかとなった。また、それらに含まれる30のサブカテゴリも、それぞれ明らかとなった。今後は、各カテゴリの困難感に応じた教育、研修のあり方について考えることが求められる。

7. おわりに

本研究では、試験的に学生、保育者、教員の持つ音楽指導への困難感の収集、分類を行ったが、各カテゴリ内の要素およびその相関関係についての検討は十分であるとはいえない。また、そもそも様々な条件のもとに調査が行われた先行研究を一括して分析対象としており、この結果をそのまま体系化のモデルとして用いることはできない。今後は、今回作成した分類を参考のひとつとしながら、これまでの枠組みや理論との関連付けを行い、内容について精査していきたい。また、学生や保育者、教員を対象とした調査研究や実践研究も必要であると考えている。

引用・参考文献

- 石田愛子(2015)「小学校音楽科指導に対する苦手意識克服のための試み：初等教科教育法（音楽）における実践」『芦屋大学論叢』(62)、59-69
- 居原田洋子(2011)「学生の幼稚園教育実習時における音楽表現の教育実践に関する研究：指導実習時の保育内容の決定理由について（1. 幼児教育者養成における教育実践、VI. 教員養成と教師教育）」『学校音楽教育研究』15(0)、236-237
- 居原田洋子(2014)「学生の音楽表現における教育実践に関する研究：課題時の音楽選択の内容について」『学校音楽教育研究』18(0)、246-247

- 上野高裕(2021)「保育者養成校における音楽表現活動の実態：2つの実習後の調査結果から」『金城紀要』(45)、77-86
- 氏家史人(2019)「教員養成課程における初等音楽科教育が果たすべく役割について：学生の「音楽」教科に対する印象と「歌唱共通教材」の認知度についての調査を基に」『日本体育大学紀要』48(2)、103-112
- 大久保友加里、杉山佳菜子、榊原尉津子(2017)「保育現場で求められている能力とその指導(3)：音楽的活動と実習先での体験を通じて感じたこと」『鈴鹿大学短期大学部紀要』(37)、211-219
- 尾見敦子(1989)「音楽科の指導技術：教育実習生の授業の分析をととして」『お茶の水女子大学人文科学紀要』(42)、53-73
- 木村みどり、古寺有希(2014)「小学校における音楽の授業に関する報告：音楽の授業の指導について」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』(59)、113-128
- 木村みどり、古寺有希(2017)「保育園・幼稚園における音楽活動に関する報告：実習生を受け入れる現場の状況」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』(62)、92-121
- 児嶋輝美、岩崎順江、川端恵子、疋田弘子、古本奈奈代(2019)「保育実践の改善をサポートする現職研修の取り組み：音楽的な活動を通して」『徳島文理大学研究紀要』98(0)、35-42
- 櫻井琴音、野口美乃里、坂井加奈(2008)「幼稚園実習における音楽表現活動に関する学生の学び」『永原学園佐賀短期大学紀要』39、69-74
- 菅裕(2007)「音楽科教育実習生の課題意識：音楽教師に求められる実践的知識の解明に向けて」『宮崎大学教育文化学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術』(16・17)、1-10
- 鈴木範之(2020)「ピアノ弾き歌い指導に関する考察：幼稚園教育実習における音楽表現活動の実態調査を通して」『常磐短期大学研究紀要』(48)、15-31
- 鈴木裕子、横井志保(2012)「『表現』における保育士の専門性を考える：保育士への意識調査をもとにして」『保育士養成研究』(30)、1-10
- 鈴木佑未子(2016)「幼稚園実習における弾き歌い及びピアノ演奏について：平成27年度アンケート調査分析結果報告」『音楽教育メディア研究』2、30-38
- 高橋好子(1969)「短大における保育者養成のための音楽教育：幼稚園実習との関連において」『青山学院女子短期大学紀要』(23)、87-116
- 高見仁志(2010)「小学校音楽科における新人教師の成長：遭遇する困難と力量形成」『音楽教育実践ジャーナル』7(2)、114-125
- 高見仁志(2019)「音楽科授業成立の鍵」齊藤忠彦、菅裕編『新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法』教育芸術社、172-3
- 武田道子(1979)「幼児の歌唱指導：導入時におけるつまずきとその治療」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 教科教育学篇』(11)、119-130
- 伊達優子(2007)「保育学生の実習の学びを再構築する音楽教育(2)：先行学習と実習との関連」『教育学研究紀要』53(1)、358-363
- 玉田裕人、国藤真理子(2019)「保育者養成校における効率的ピアノ指導方法の模索：実習園で必要とされている楽曲やピアノ演奏技術を基に」『研究紀要』(40)、95-107
- 辻有里(2020)「幼児教育における音楽指導上の課題：幼稚園教諭の自由記述回答から」『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要』(3)、157-168
- 植田幸子(2020)「保育実習での経験を生かし弾き歌いの力を伸ばす指導の考察：何のために子どもたちを歌うのか」『名古屋短期大学研究紀要』(58)、97-106
- 筒石賢昭(1985)「音楽科における教育実習改善の研究(1)：音楽科教育実習生と現場音楽科教師の意見の記述的研究」『教育実践研究指導センター紀要』1、27-36
- 富田英也(2005)「保育者希望学生の音楽的資質形成について：教育実習と保育実習の音楽表現活動の実態を基に」『論集』1(1)、89-106
- 豊辻晴香(2018)「領域『表現』のねらいや内容が達成される音楽表現活動を学習するための音楽系授業の一考察：現場実習を経験した学生のアンケートをもとに」『純真紀要』(58)、29-41
- 中池順子(2020)「教育実習(幼稚園)における音楽活動の実態と学生の現状：本学の取り組みと課題」『第一幼児教育短期大学紀要』11-26
- 中野研也、河野久寿(2012)「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」『仁愛女子短期大学研究紀要』(44)、71-78
- 長嶺藍加(2021)「教育実習生の音楽科授業中の意思決定に関する研究：PCKを視点として」『宮崎大学教職大学院年報』(1)、1-10
- 中村千晶(2006)「養成校における音楽教育に関する一考察：実習をととして」『聖和大学論集 A・B 教育学系・人文学系』(34)、95-103
- 日本教科教育学会編(2017)『教科教育研究ハンドブック：今日から役立つ研究手引き』教育出版
- 野上俊之(1998)「教育実習生の音楽行動」『和顔愛語』(26)、17-20
- 萩野勝、伊達優子(2019)「初学者に対する有効性の高い指導方法：英語授業とピアノ実技指導における『既知のもの』の活用をめぐる」『岡山大学教師教育開発センター紀要』(9)、323-335
- 早川倫子、虫明真砂子(2012)「歌唱指導における教師力の育成について：免許状更新講習の実践を通して」『岡山大学教師教育開発センター紀要』(2)、60-70

- 藤田光子(2018a)「歌唱学習に対する意識と継続的指導の過程から：保育者・教育者養成校における調査より」『別府大学短期大学部紀要』(37)、105-111
- 藤田光子(2018b)「音楽科教材研究に向けた取り組みから：音楽表現・音楽の継続的学びに着目して」『別府大学短期大学部紀要』(39)、69-76
- 伏見強(2001)「教育実習の成果を上げるための取り組みについての検証：中学校教諭二種免許・音楽科」『奈良文化女子短期大学紀要』(32)、37-47
- 丸山京子、仲野悦子(2000)「保育者養成における音楽指導の一考察：幼稚園実習をとおして」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』(32)、53-73
- 水上和子(2013)「音楽表現の視点からの実習指導(3)：効果的な実習体験を目指しての試行」『金城紀要』(37)、151-159
- 宮本憲二(2013)「中等科音楽における教育実習の現況と課題：教育実習”振り返りシート”の考察を通して」『尚美学園大学芸術情報研究』(22)、1-27
- 森薫(2017)「保育者養成課程における音楽実技指導に関する身体論的考察：幼稚園実習の振り返り記述を通じて」『東京未来大学研究紀要』12(0)、93-101
- 守屋操、井上房子、古埜弘子、白神繁子、平松由美子、馬場訓子、高橋慧(2017)「幼稚園教育実習の事前指導の在り方を探る：実習前の学生の心情から」『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要』50(1・2)、1-13
- 諸井サチヨ(2019)「保育内容の指導法『音楽表現』に関する一考察：学生の実習における子どもの表現活動を扱った指導計画に関する意識調査を通して」『淑徳大学短期大学部研究紀要』(59)、97-108
- 山崎正彦、佐野靖(2010)「いま、若手音楽教員はどのような課題に直面しているのか?」『音楽教育 Vent』17、26-30
- 横井志保(2021)「保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか：保育士の語りの分析から」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』58(1)、11-21
- 吉田康成(2008)「実習不安の内容と変化(Ⅱ)」『風川学院短期大学教育実践研究紀要』(1)、31-38
- 吉村淳子(2012)「保育者養成におけるピアノ教育についての試み：学生へのアンケート調査から」『新見公立大学紀要』33、87-92
- 吉村淳子(2013)「保育者養成におけるピアノ教育に関する一考察」『新見公立大学紀要』34、51-54
- 陸路和佳(2012)「幼稚園実習におけるピアノ課題の現状」『有明教育芸術短期大学紀要』3、79-88
- Shulman, L. (1987) Knowledge and teaching, foundations of the new reform. Harvard Educational Review, 57(1), 1-22

